

(社)東洋音楽学会西日本支部 支部だより

Newsletter of the West Japan Chapter, Society for Research in Asiatic Music

第55号 (2006年4月14日)

□ 定例研究会のご案内 □

● 第228回定例研究会 (日本音楽学会関西支部第323回との合同例会)

と き : 2006年5月13日 (土) 13:30 ~

と ころ : 京都市立芸術大学 L2教室

(京阪京都交通バス JR京都駅、阪急桂駅東口、四条河原町より (亀岡方面) 「芸大前」下車すぐ) 地図 :

<http://www.kcua.ac.jp/access/>

内容 : 修士論文、博士論文研究発表^I

○ 修士論文

1 . 齊藤 桂 (大阪大学)

「日本近代詩の発展における歌との関わり」

2 . 出口 実紀 (大阪芸術大学)

「八重山民謡《とうばら一ま》の伝承考察」

○ 博士論文

3 . ステラ・ジブコバ (大阪大学)

「日本文化における表現

- 口唱歌に見られる image-laden loci の現象に関する研究」

4 . 舘 恵美 (大阪芸術大学)

「ローベルト・シューマンの初期歌曲 - その出発と展開」

5 . 寺田 真由美 (神戸大学)

「明治期以降における三味線小歌曲 - 都市民俗音楽としての三味線小歌曲」

● 第 2 2 9 回 定 例 研 究 会 （ 日 本 音 楽 学 会 関 西 支 部 第 324 回 と の 合 同 例 会 ）

と き : 2006 年 6 月 17 日 (土) 13:30 ~

と ころ : 神 戸 大 学 発 達 科 学 部 C-101 教 室

(JR 六 甲 道 駅、 阪 急 六 甲 駅 下 車。 ど ち ら も 神 戸 市 バ ス 36 系 統 (鶴 甲 団 地 行 き) に 乗 り、 「 神 大 発 達 科 学 部 前 」 下 車)

地 図 : <http://www.kobe-u.ac.jp/info/access/rokko/hattatsu.htm>

内 容 : 修 士 論 文、 博 士 論 文 研 究 発 表 ^{II}

○ 修 士 論 文

1. 菌 田 郁 (大 阪 大 学)

「 人 形 浄 瑠 璃 に お け る 物 語 体 験 に つ い て

- 「 演 じ る 」 こ と と 「 語 る 」 こ と が も た ら す も の 」

2. 岡 村 真 (大 阪 芸 術 大 学)

「 フ ラ ン ツ ・ シ ュ ー ベ ル ト の ミ サ 曲

- ヨ ー ゼ フ ・ ヴ ァ イ グ ル と の 比 較 を と お し て 」

3. 庄 司 裕 (神 戸 大 学)

「 1960 年 前 後 に 台 湾 に お い て 発 生 し た 〈 改 作 歌 謡 〉 に 関 す る 研 究 - 原 曲 と の 音 楽 的 特 徴 の 比 較 検 討 を 中 心 に 」

○ 博 士 論 文

4. 橘 田 勳 (大 阪 大 学)

「 清 末 民 国 初 江 南 に お け る 文 人 琵 琶 楽 の 成 立 と 展 開 」

5. 直 江 景 子 (大 阪 芸 術 大 学)

「 表 演 芸 術 と し て の 東 大 寺 修 二 会 - 場 と 時 間 の 構 造 」

* * * * *

□ 定 例 研 究 会 の 記 録 □

- 東 洋 音 楽 学 会 西 日 本 支 部 定 例 研 究 会 第 227 回 例 会

と き : 2006 年 3 月 4 日

○発表者要旨：光平有希「ピュタゴラスの音楽療法について－イアンブリコス『ピュタゴラス伝』を手懸かりに－」

太古から人間は心身の治療や健康促進、維持をする手段として音楽を用いてきた。医学や科学技術が飛躍的に進化した現代においてもその傾向は留まることを知らず、今も多くの領域で音楽療法は実践され重要視され続けている。私は以前より音楽療法の歴史に興味を抱くと共に、音楽療法の奥深い歴史の中で生み出された偉大な遺産を紐解いていく事が現代の音楽療法理解に繋がると考えてきた。従って本発表では、「同質療法」や「逆療法」といった音楽療法の根本的治療原理が形成されたと考えられる古代ギリシア時代に遡り、その中でも新ピュタゴラス主義のイアンブリコス『ピュタゴラス伝』を手懸かりとして、ピュタゴラスの音楽療法について考察を加えた。

今回は卒業論文として執筆したものを基に発表を行ったが、第1章ではイアンブリコスの『ピュタゴラス伝』成立の過程と内容構成、更にそこに見られる音楽的記述に焦点をあてた。この中でも音楽的な記述が多くなされているのは第15章と第25章であり、この2つの章の重要部分を比較検討してみたところ、これらの記述の中には病的な人に対する治療のための音楽の使用例と、生活習慣の中での音楽の使用例という2種類の音楽使用目的があったことが分かった。

第2章では更に的をしぼり、逆療法の原理について考察した。ピュタゴラス派の人々は音楽によって宇宙や自然のハルモニアを魂の中に吸収して同化させ、魂のカタルシスをなす事が出来ると考えた。さて、多くの研究者達はピュタゴラスの「逆療法」をこの天体の音楽を胎内に取り込むことによって、心身を逆の状態へ転導する事が出来ると説明してきたが、これをイアンブリコス『ピュタゴラス伝』の音楽的記述と照らし合わせてみると内容的に合致するのは1箇所のみであり、これまでの研究ではこの面が過度に強調されすぎたのではないかと考えられる。従って、私は「逆療法」にはもう1つの理由、相対立するものから調和を見出す試みというものがあつたのではないかという視点を立てるに至った。

原理について把握したところで次に実際に行われていたとされる治療例にも目を向けてみた。ピュタゴラス派が音楽療法に用いていたのは、主にリラとアウロスという2種類の楽器であり、第3章ではリラによる音楽療法に焦点をあてた。私見によると、このリラを

用いた音楽療法は原初のピュタゴラス教団にまで遡っていくものであり、その後もピュタゴラス派の伝統として受け継がれ、精神の緊張を緩和する際などに用いられたと考えられる。

一方、第4章ではアウロスを用いた音楽療法を扱い、精神と身体に対する治療例という2側面から考察を加えたが、身体に関わる治療例をピュタゴラスの発見とするのは無理なこじつけであり、また精神を扱った治療例についても、アウロスに付けられた性格付けがアテーナイ古典期、特にアリストテレス以降のものによっており、果たしてピュタゴラス自身にまで遡るものであるかどうか疑問の余地がある。おそらく後代の伝承であろうとの結論に至った。

○ 発表者要旨：能登原由美 「16世紀後半イングランドにおける写本集成とその過程」

筆者は以前、16世紀イングランドにおける楽譜の印刷・出版活動の不振の原因の一つに根強い写本文化が影響していたのではないかと指摘した〔拙著「16世紀後半イングランドにおける楽譜出版活動の展開－楽譜受容の視点から－」『音楽文化教育学研究紀要XVI』（広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学講座）（2004年）13-26頁〕。ここでは、16世紀後半においてもなお写本の受容が衰えず、逆に印刷楽譜の受容が伸び悩んでいた事実を明らかにすると同時に、その背景に、写本と印刷楽譜集の間にみられる相違——多様性と単一性——が影響していた可能性を示した。しかし、16世紀後半のイングランドにおける楽譜の印刷・出版活動の展開に焦点をあてたこの小論では、考察の対象は印刷楽譜集であったため、写本をじかに調査することはできなかった。

そこで、本研究では、印刷楽譜集にはみられない写本ならではの特徴を明らかにするべく、現存する写本の調査を行った。とりわけ、写本が成立するまでの過程に焦点をあてることにより、両者の相違を明確にできるよう試みた。1550年から1600年にかけて成立したとみられる現存の写本のうちの約9割にあたる93点を対象に、写本の内容——写本に収められた曲の作曲家やジャンル——について検証し、そのうち現物（マイクロフィルムを含む）を調査することのできた70点についてはさらに、写譜の状態——筆記、余白とレイアウト、タイトルと作曲家名の記載——を検証した。

その結果、16世紀後半のイングランドで成立した写本には、写本全体を通じてその内容や写譜の状態に統一性のある場合とない場合があることが明らかとなった。この「統一性／非統一性」という視

点は、同時代の楽譜収集家によって集成された写本群の同質的特徴から考えると、写本の成立に終始一貫した影響力や意図が存在したかどうかを判断する指標となると考えられる。その点を踏まえた上で、写本の集成過程や成立の目的を考察し、本研究の結論として以下の点を導いた。すなわち、16世紀後半のイングランドで成立した写本には、大きくまとめると次の3つのタイプが存在する。①写本全体を貫く意図はないが、長年の間に書きためられた結果、成立した写本、②コレクションとして作成された写本、③献呈・贈呈用に作成された写本、である。このうち最も多いのは、最初のタイプであった。このように、全体を貫く意図はないが、長年の間に書きためられた結果、成立する写本が多かった事実は、印刷楽譜集と写本について、両者の成立の過程に大きな相違があることを示していると言えるのではないだろうか。つまり、楽譜集として成立するまでの時間の長さ、楽譜集全体を貫く意図の有無、である。今後の課題として、この点を論証するべく写本と印刷楽譜集の成立の過程における相違を具体的に比較・考察することを挙げて、発表を締めくくった。

○発表者要旨：北澤隆明「西洋音楽観の〈現代〉一朝比奈隆と日本の西洋音楽受容をめぐって」

クラシック音楽という制度を成立させうる〈知識〉とは何だろうか。あるいは、クラシック音楽にかかわるさまざまなテクストを維持する、ひとつひとつの概念とはどのようなものだろうか。クラシック音楽観をめぐるアプローチには多様な説明が与えられうるが、記号論や文化研究が広く適用してきたテクスト分析や言説分析の概念は、クラシック音楽をめぐる文化的考察にたいしても、十分汎用されるものと思われる。

朝比奈隆は「語られる」ことのおおい音楽家だった。なかでも書籍や音楽雑誌、テレビ・ラジオ番組における彼自身の言説と、音楽評論家や愛好家が彼の演奏や活動に対して与えた言説にはいくつかの共通性が読みとれる。たとえば①朝比奈が「大正デモクラシーで育った筋金入りのインテリ」であることに触れ、偉大な指揮者には「人間としての幅」があると評価する教養主義的なものや、②彼が生涯現役の指揮者であったことに触れ、彼の演奏を「老年の稔り」「至高の境地」などという言葉で表現する精神主義的概念などが代表的だが、③朝比奈が得意としたベートーヴェンやブルックナーの演奏を「神に対する巡礼」「汎人間的」といった言説で普遍的する

概念も、日本のクラシック音楽受容の特徴として注目されよう。

以上のようなクラシック音楽をめぐる概念について、たとえば①については、戦前の日本のクラシック音楽受容と教養主義との関連が推察されるが、今回の分析では、朝比奈隆の足跡と照らしながら、彼の音楽家としての足跡そのものが戦前の教養主義の中で育まれたものであるという推論を提示している。また彼の活動が音楽評論家や愛好家の間で注目されはじめるのは1970年以降のことであり、レコードの普及など、戦後のメディア文化形成とのかかわりについても注目しておくべきだろう。これは、朝比奈隆という音楽家が、おおくの録音媒体を残しており、ベートーヴェンやブルックナーの録音回数が日本のクラシック演奏家のなかでもっともおおいという事実からも推察される。

90年代以降の朝比奈は「カリスマ」に近い存在であり、一部の愛好家による根強い人気に支えられてきた。それは②で述べたような、もはや音楽の「内容」や技術主義的な面は度外視した、朝比奈隆の精神性そのものを崇拜するような聴取姿勢によるものだが、80年以降の消費社会の成熟、音楽化社会（小川1988）の到来という現象としめしあわせた時、こうした音楽の消費のされ方も、現代の「クラシック音楽文化」を支える音楽観の一側面を映し出しているかのようにも思える。

朝比奈隆をとりまくテクストは、これまでの日本のクラシック音楽受容の文化的側面を考えるにあたってのひとつの手がかりにすぎない。今後戦後音楽文化に対する精緻な考察を進めるなかから、現代日本の「クラシック音楽文化」を探ることが求められる。

○ 報告者：福本康之

去る3月4日、広島大学東千田キャンパスにおいて、東洋音楽学会西日本支部第227回定例研究会が、日本音楽学会関西支部（第322回例会）との合同研究会として開催された。まず、今回の定例研究会については、まだまだ寒さの厳しいなか、30名近くの参加者（しかも半数以上が近畿圏や九州の会員）があったことを記しておきたい。

以下本稿では、当日の最初と3番目の研究発表についてのレポートを行う（2番目の発表と「演奏と解説」については、別稿井手口氏のレポートを参照されたい）。

最初の研究発表は、光平有希（エリザベト音楽大学）氏による「ピュタゴラスの音楽療法について—イアンブリコス『ピュタゴラ

ス伝』を手懸かりに」であった。光平氏の研究は、標題の通りイアンブリコスの『ピュタゴラス伝』を手がかりに、ピュタゴラスの音楽療法を採りあげたもので、発表では、実際にピュタゴラスが行ったとされる、リラやアウロスを用いた音楽療法の詳細な事例紹介にそって、論が進められた。

この発表自体は、卒業論文に基づくものであるが、発表者が「従来強調されすぎてきた」とみるピュタゴラスの「天体の音楽を胎内に取り込む試み」だけではなく、「相対立するものから調和を見出す試み」というピュタゴラスの音楽療法のあり方について焦点を当てた点や、イアンブリコスなど後世の著作に見られる「アウロスによる音楽療法の例」が、ピュタゴラスにまで遡るものであるかは疑わしいという仮説は、示唆に富むものといえよう。

発表後の質疑応答では、具体的な音楽に関する質問がいくつかあった。発表者も、スpondeイオンの韻律などについて触れてはいたが、今回の発表は、全体として音楽療法に用いられる楽器や音楽の旋法を中心としたものであり、ピュタゴラスの音楽療法の分類も、まずは用いる楽器の種類（アウロスかりラか）によっていた。楽器と実際の音楽が何かしら特定の関係にある（特定の旋律に対して楽器の指定があるなど）場合は、そうした分類も可能であろうが、フロアーからの指摘にもあったように、そうでないならば、ピュタゴラスの音楽療法の効果が、楽器と具体的な音楽のいずれに依存する（割合が大きい）ものであるか、という判断がその前段階として必要となるだろう。そのためには、具体的な音楽がどのようなものであったかについての検証と考察も求められるはずである。その点については、発表者が今後の課題としているので、次の機会に期待したい。

3番目の研究発表は、北澤隆明（広島大学）氏による「西洋音楽観の〈現代〉一朝比奈隆と日本の西洋音楽受容をめぐって」であった。北澤氏の研究は、人々の知識や常識が社会を構成するという考え方や、同じ価値観や認識をもつ人々が集まることによって「場」を形成するという考え方に基づき、「クラシック音楽界で特別な存在であった」朝比奈隆と朝比奈隆を取り巻く人々（「朝比奈ファン」）を切り口として、「現代日本の「クラシック音楽文化」の一側面」を読み解こうとする試みである。

具体的には、朝比奈自身や彼を取り巻く演奏家、評論家、愛好家による言説から、朝比奈および「朝比奈ファン」が共有する「知識」

として、北澤氏は、①教養主義、②普遍概念化、③精神主義を指摘する。その上で発表者は、a) 教養主義、b) 正典(カノン)化、c) メディア文化、d) 消費文化といった面において、先行研究との照合を行っており、こうした視点は、日本の洋楽受容のより多面的な様相を浮き彫りにしてくれるもので、興味深いものであった。ただ、確かに朝比奈隆や「朝比奈ファン」は、日本の音楽界において、ある種の「場」を形成していたではあろうが、発表のなかでも触れられていたように、朝比奈や「朝比奈ファン」が形成する場や現象は、日本の音楽界でも特異なものである場合が少なくはない。その点に鑑みれば、朝比奈や「朝比奈ファン」を切り口として読み解かれる「現代日本の「クラシック音楽文化」の一側面」が、現代日本の「クラシック音楽文化」のなかでどのように位置づけられるものとなるのか、その点についての北澤氏の今後の研究に興味を持たれる。

○報告者：井手口彰典

二番目の発表者は、広島大学大学院教育学研究科で音楽教育学の助手を務める能登原由美氏、タイトルは「16世紀後半のイングランドにおける写本集成とその過程」であった。往時のイングランドにおける楽譜印刷・出版活動が、ヨーロッパ大陸に比べさほど盛んでなかったという事実を踏まえ、その理由を彼の地に根強く残っていた写本文化に求めようとする研究である。能登原氏はこれまで、同国における印刷楽譜出版を対象とした研究を継続的に行ってこられたのだが、今回の発表は、その印刷楽譜に「取って代わられる」筈の写本の側にスポットを当てることで、逆照射的に印刷楽譜の意義を浮かび上がらせることを狙った、と見るのはレビューアーの邪推だろうか。

発表では、1550年から1600年にかけて成立したと見られる現存する写本90冊余りを対象に、①収められている楽曲のジャンルや作曲家、②タイトルや歌詞、作曲者名などの情報記載の有無、③筆跡から推測される写譜家の人数、④余白やレイアウトの秩序の有無、などを数量的に整理し、その上で「統一性／非統一性」という視点からの写本の区分を試みる、というスタイルが取られた。発表者ご本人による要約が寄せられることになっているので詳しくはそちらに譲るが、結論としては、16世紀後半のイングランドにおける写本にはコレクションや献呈など明確な意図の下に制作されたタイプのものよりも、全体を貫く意図や目的が希薄なまま長年の間に書きため

られた結果として成立したと考えられるタイプのものの方が多い、という知見が示された。

発表に説得力を付与していたのは、氏自らがイギリスを回って調査したという大量の一次資料のリストである。マイクロフィルム等のソースを含むとはいえ、これだけの数の現物に直接当たられた労力にはまずは敬意を表したい。しかし、それだけの労力の結果が統計上の数値として即物的に処理されてしまったことは、発表の見通しをクリアにする潔い態度と評価できる一方で、ある種の「もったいなさ」にも通ずる。発表時間の制約もあったのだろうが、プレゼンテーションのなかに具体例としての一次資料がもっとふんだんに投入されていれば、フロアも氏の取り組みの一端に触れることができ、結論を導き出すまでの道程の険しさを追体験できたのではないだろうか。

また他国との状況比較が殆どなされなかったのも気になった点の一つである。その道の専門家には常識のことなのかもしれないが、楽譜出版の不振にイングランドの特殊性が関わっているのだとすれば、それが他国との比較において具体的にどのようなものなのかについて、フロアに配慮したもう少しの言及が欲しかった。

最後にもう一点、これまでの氏の研究を知る者としては、本発表の結果が今後の氏の研究とどう結びつくのかも知りたいところである。質疑の中でも、コレクションや献呈といった「明確な意図」の下に制作された写本と印刷楽譜との繋がりが議論されていたが、こうした点について現時点で氏がどのような仮説なり見識なりを持っておられるのか、簡単でよいので聞かせて欲しかった。

等々、色々と無い物ねだりをしてしまったが、今回の発表が、氏の研究の幅をさらに広げようとする意欲的な一歩であることには間違いがない。今後のさらなる議論の展開を心待ちにしたい。

例会の最後を飾ったのは、エリザベト音楽大学の修士課程を昨年9月に終了した内モンゴルからの留学生、弓暁寧さんによる、古箏とヤトガの演奏であった。ヤトガとは内モンゴルの伝統的な箏である。ヤトガの起源については、弓さんの解説によれば中国の古箏が変化したものとする説と、モンゴル民族に独自の楽器だとする説とがあるというが、いずれにせよ詳しいことは分かっていないらしい。ヤトガには絹糸を用いる12弦のものと、金属弦を用いる13弦、18弦のものがあるそうだが、本日会場に持ち込まれたのは主に内モンゴル西部に分布している18弦の楽器であった。全長140cm、

幅 28 cm 余りの桐製の筐体は、隣に並べられた 21 弦の古箏と並べると若干小振りである。チューニングは、古箏が最高音から弦の並びの通りに最低音まで下がる（従って駒は楽器の上を一行に並ぶ）のに対し、ヤトガでは奏者から見て最も遠い 3 弦（いわゆる一の弦から三の弦まで）がオクターブ以上高く調弦される。この調弦法はヤトガに独自のものであり、選択する調子の違いにかかわらず共通しているという。

演奏プログラムは、まず古箏による演奏で〈高山流水〉、次いでヤトガによる演奏で〈阿都泌阿斯尔※〉、〈民歌〉、〈小曲〉と続いた。中国の古箏ならば日本国内でもしばしば聴く機会があるが、ヤトガの生演奏は非常に珍しいとのこと。まして、両者を並べて聞き比べることができるというのだから、音楽学会ならではの非常に貴重な体験といえよう。もっとも、恥ずかしながら筆者は、ヤトガはもちろんのこと古箏の生演奏に接するのも今回が初めてである。どのような音楽だろうと身構えていたのだが、流れてきたのは我々日本人の耳にもなじみやすい柔らかな旋律。奏者の優れた腕もあり、心から楽しむことができた。特に、弓さんのお姉さんがボーカルパートに加わった〈民歌〉は、落ち着いたシンコペーションのリズムと、どこか『めだかの学校』にも似た節回しが魅力的な、印象に残る 1 曲であった。（※「尔」は代字。正しくは、二画目の右端に、左下へ向かうハネが入る。）

● 研究発表申し込みについて

西日本支部の定例研究会での研究発表申し込みは下記までご連絡ください。

〒610-1197 京都市西京区大枝沓掛町 13-6

京都市立芸術大学日本伝統音楽研究センター藤田研究室

tel/fax 075-334-2392 e-mail: tfujita@kcua.ac.jp

● 入会申し込み・住所変更について

入会ご希望の方は、80 円分の郵便切手を同封し、下記の学会本部事

務所へ入会案内・申し込み用紙をご請求ください。入会申し込み用紙は、ホームページ <http://wwwsoc.nii.ac.jp/tog/> からダウンロードできます。

会員の住所等の変更についても本部事務所へお知らせください。

〒110-0005 東京都台東区上野 3-6-3 三春ビル 307 号

Tel : 03-3832-5152 (Fax 兼)

e-mail: LEN03210@nifty.com

発行 : (社) 東洋音楽学会西日本支部 編集担当 : 寺内直子

〒658-0016 兵庫県神戸市灘区鶴甲 1 - 2 - 1

神戸大学国際文化学部 寺内研究室 気付

e-mail: naokotk@kobe-u.ac.jp 、 fax: 078-803-7509 (寺内気付)
